
	<p>横浜市立大曾根小学校</p> <h1>学校だより</h1> 	<p>令和4年5月27日</p> <p>TEL 542-1785 FAX 541-0949</p>
---	---	---

子どもは「ちいさな大人」ではない

副校長 宇谷あや

先日、3年生の子どもたちとまち探検に行きました。大曾根小学校では、安全に校外学習を行うために、必ず、担任の他に、もう一名の大人が引率に付き添います。列の一番後ろについて歩きながら、子どもたちのつぶやきを聞いていました。

第一回目のまち探検の時には、担任が、「まちの中で見つけたものをいろいろメモしておいてね」と声をかけると、子どもたちは、「あ！もんしろちょういた！」「猫！」「先生、きれいな葉っぱー」と、身近な生き物や植物を熱心に見つけて教えてくれました。「電車が走っているね。橋を渡るとお店が多いね」などと、私も声をかけてみますが、「そうだね。あ、蟻！」という感じです。「お水がきらきらしている」と教えてくれる子どもたちと話をしながら、私もそこにあるのに見えていなかった、もんしろちょうやお水のきらきらに気づき、子どもたちの可愛らしい物のとらえや子ども特有の視野を改めて感じて感心しつつ、第一回目のまち探検を終えました。

それから数日たって、第三回目のまち探検の引率のお手伝いをしました。すると子どもたちが、「学校の東側にはお家が多いね！」「綱島街道に行くまでの道は、あんまり車が通らないね」などとまちの様子に目を向けています。「いいところに気付いたね」と担任に褒められるともっともっと、まちの様子に目を向けた発言が増えていきました。まち探検を重ね、いっぱい学びを深めて、新しいものの見方を獲得しているなあと嬉しく思いました。

教育学部で学ぶ学生は、フランスの哲学者ルソーの教育論「エミール」について学びます。17世紀頃まで、「子どもは未熟な大人だ」と扱われていたなか、ルソーは「子どもは小さな大人ではない」という当時としては新しい立場で「エミール」を執筆しました。ルソーが「子どもには子ども時代という固有な世界がある」と述べていましたが、学生時代の私には、実感を伴って理解することができませんでした。教員となった今では、よくわかります。子どもは子どもであり、小さなサイズの大人ではなく、大人とは異なる感性と世界のなかいきいきと生きているのだと、子どもたちと過ごしていると日々実感させられます。子ども特有の固有な世界を大切に尊重しながら、子どもの発達段階に即した教育を行い、新しい視点で物事をとらえるお手伝いを、私たち教師は日々、行えたらと思っています。

校長室の前に、ポストがあります。大曾根小学校の良いところをお知らせするポストです。子どもたちは、ときどきしながらも、大喜びでポストに手紙を入れ、校長室に顔を出して、校長先生と話をし、楽しそうに過ごして教室に帰ります。折り紙で作った飾りをプレゼントしてくれる子もいます。校長も私も子どもたちのいきいきとした感性に触れて幸せな時間を過ごしています。

私たち校長、副校長も子どもたちの世界を理解しサポートする一員でありたいと思っています。